

神技の剥製本田晋先生のあれこれ

新 保 守



科学の殿堂であり、子供のアイドルであるあの華やかな国立科学博物館の地下室の一隅に腐臭とも死臭ともつかぬ悪臭の中で、半世紀近く“生命あるものの再現”一筋に生涯をかけ続けている人がいる。この人こそ、昨年黄綬褒賞の栄に輝いた本田晋先生である。

世間に剥製を作る人は多い。しかし学術に寄与する剥製家は、先生をおいて他にないだろう。

自然の不思議をときあかすために、すべての生命を再現し、研究の手助けとなる生態を提示することこそ“剥製”のもつ意義でなければならない。

昨年の秋、郷土自然科学博物館にお立ち寄りになられた際、館長が天然記念物のカモンカやコウノトリなどその立派な剥製を自慢されたが、このときなど、そくぎに「これは、たしかにカモンカです。」「これも間違いなくコウノトリです。」と、答えられただけで、くどくどしい説明はされなかった。なるほど、それは本もののカモンカの毛皮であり、コウノトリの羽毛であった。その姿はだれがみてもよくできている。しかし、それは“生き方”の再現ではなかったし、“生命あるものの探究”にはあまりにもかけはなれていたであろう。先生の目には、デパートのウインドや商店の店先にかざられた装飾品となんらかわるところがないので関心をもたれなかったことと思われる。

“剥製” 私にとってそれはなんだろう。先年、故人となられた東谷先生に手ほどきをうけた頃は、趣味であり、床の間に飾って悦に入った置き物に過ぎなかった。しかし現在は、生命の探究的過程の中で、正確に科学的資料となりうる剥製、それは確かに生きているときの生態、習性、変異など、更には比較解剖学的要素にまで貢献すべき資料となり得るものだと確信している。

近年、剥製の作り方という本がでまわるようになった。しかしどの本をみても、すべてそれは趣味の域をでないしろものである。また、その著者が先生とのかかわりの中で執筆するにいたっては大変な迷惑といわざるを得ない。

先生のプロフィールに関しては今日までに書いたことがある。そのつど先生の奥様に失笑をかうのだが、今回もお許し願おう。

栃木県芳賀郡物部村（現二宮村）大字高田809番地高田山専修寺の香がたちこめる境内に生まれる。晋（しん）これは坊さんがつけた名で、中国では芸術家が好きでつけるとか。漢和辞典に

は、『日が出てあたたかとなって万物がすすみ出る』とある。字は体をあらわすというが、まさにその通りであると思う。尋常高等小学校を卒業するまでこの地で過ごされたためか、純粹の東北弁は今も健在である。仙人をおもわせる風貌からは、ときとして深げいの忍者オオサンショウオのような朴訥さを感じさせる。櫛を入れることを好まない頭髪は肩にたつし、口ひげはボウボウである。深く刻まれたシワにホホ骨が張り出し、右眼満眼、左眼半眼、宝剣をメスにかえて立つ姿は、まさに大日如来の生れかわり、不動明王そのものである。

この人この道 (望星 vol 1 №2 1970 東海教育研究所)に、『剝製家 本田晋。実はこの人、日本の剝製技術の創作者 坂本福治の三代目を継いできている人。二代目坂本喜一氏に弟子入りし、昭和5年国立科学博物館の「トドの夫婦」など大もの4コマを師とともに製作。たちまち頭角をあらわし、10年には渋谷の忠犬ハチ公、14年にはアメリカで開かれた第7回万国博の家禽競技会に日本鶏保存協会が出品した28羽のニワトリを製作し、各国からその優秀さを認められた。10メートルのツチクジラ、名馬、鳥類とほとんどのものを手がけてきた。』また、腕——科学をささえる人びと——(科学朝日 vol. 32 №5 1972 朝日新聞社)には先生のすべてが、克明に記されている。

『「剝製ってというのは、死んだものを生かすものですよ」製作の手を休め、遠くから作品を眺めながら、彼はポツリという。茶色のベレー帽からは、白いものの混じったボサボサ髪がはみでている。同系色のズボンは、チャックが開いたまま。他人のことは一向気にしないようだ。一瞬、深く刻まれたシワの間から、鋭い光が飛んだ。カニは固定された。全長3メートルは優にあるタカアンガニが、今暗い海の底から引きずり出され、明るい照明の中を歩き始めようとしている。彼とは——本田晋(ほんだしん)さん。国立科学博物館文部技官。明治45年7月3日生れ』と記載されている。

栃木県の片田舎に生まれ、幼年期はまだ目の開かないヒナを見つけてきては、自分で餌をやり、飛べるようになると肩にのせては遊んだといわれる。16才にして単身上京、発明家を夢みるが世の不景気波におかれて断念。そうこうするうちに、昭和5年の暮れ18歳のとき、当世随一といわれる坂本喜一氏の弟子として、剝製づくりの道に入る。その後の経緯については、年譜を付記する。

先生にとって酒は、生きている喜びであり、煙草は自然を確認するためのエネルギー源である。研究中ほとんど無言である。何事によらず「ビタッとこなくちゃ」この言葉一本である。煙草は、探究の過程において、その作品が間違いなく生きているか、距離をおき、間をおいてたしかめる大切な覚醒剤であり、カンフル剤なのだ。

いったん研究室をでるや、次は赤提灯である。大へんな酒豪家であり、この道の横綱である。私の家にお泊りになられたときなど、朝目がさめるや、水を一ぱい所望されるまま、家内がコップに水をもっていったところ、とんだ感違いで失礼してしまった。仕事をはなれば、ほんとうに酒がお好きなようである。

「もう家の一、二軒はとっくの昔に建っているんですがね」

と奥様がおっしゃれば、「今住んでいる家は館から帰ると、コツコツひとりで建てたんでね。」

「子供がふえるたびに、一部屋づつ建てまして、なかなか愛着があるんだ」、「20年このかた、建てつけに一分の隙もないんだから、いやんなっちゃう」、「もうそろそろ建てなおそうと思うんですが、この都会のど真中ちゅうに、軒先に山鳩が巣造りしているので、かわいそうでね」まったくほほえましい言葉である。

酔いがまわると、先生独自の哲学が始まる。それはいささか禅道めいていて厳しい。だが実に単純で、清潔で、明解である。きまったように「人間が自然を破壊するんだ」そして最後は、「この手で自然を再現してみたい」とおっしゃる。熟し柿をメジロがついばむ。柿の汁が一筋ツと糸を引く。一瞬バランスをくずしてパッと羽をひらく。ホトトギスのヒナの大きな口に小さなウグイスがせっせと餌を運んで育てる。モズの生贄もいい。ヒバリのさえずりもいい。自然の話になると、若者のように熱っぽくなる。

酒に酔い、自然に酔い、己れに酔って一日が終わる。そしてまた「自然を再現」するために「生命あるものの再現」のために明日を信じて帰路につかれる。

今日まで剥製製作一筋に生きてこられた永年の功績により黄綬褒章を受章された先生に心から敬意を表し、ここに年譜を掲載して、先生の人なりにふれてみたい。

本 田 晋 先生 年 譜 (一部抜粋)

- | | | |
|-----|-------|--|
| №11 | 昭和11年 | 師坂本喜一に協力して東京科学博物館新館の「山林の動物生態」「あしかの生活状況」「ハゲワシ」「トナカイ」の生態展示を完成する。 |
| №10 | 10 | 忠犬ハチ公の剥製製作 |
| 12 | 〃 | 北海道庁水産課の依頼でトドの剥製製作 |
| 13 | 〃 | 日本丸船長長田恵春氏収集のツノトカゲの剥製製作 |
| 15 | 11 | 函南丸船長小間芳男氏収集のアデリーペンギン、タブチオンの剥製製作 |
| 16 | 〃 | 農林省鳥獣調査所の依頼で70種350点の鳥類の仮剥製を本剥製に製作 |
| 17 | 〃 | 大宮の小穴養鶏場で日本鶏30点、三井養鶏場で日本鶏15点の剥製標本を製作 |
| 18 | 12 | 全長334cmのタカアシガニを仮剥製にし、米国バッフアロー科学博物館に贈呈 |
| 19 | 〃 | 函南丸船長小間芳男氏収集のギンイロミズナギドリ、ナンキョククロミズナギドリ、ユキドリ、ナンキョクトウゾクカモメ、ミナミウミツバメなど剥製製作 |
| 21 | 13 | 大宮御所から鳥類、魚類の剥製を下命され製作 |
| 23 | 〃 | 朝香宮家のご依頼により鳥類の剥製製作 |
| 24 | 14 | 米国万国国家禽展覧会に日本鶏28点の剥製を製作し日本代表として出品(この標本は現在米国オハイオ州立博物館に収蔵されている) |
| 25 | 〃 | シマフアランジャー、阿波島産のスナメリ、樺太産のトナカイなど剥製製作 |

№26	昭和14年	コウモリザルの剥製製作
29	15	秩父産カモシカの剥製製作
32	16	東京科学博物館で地学関係の化石標本の模型を製作
37	17	京都・仙台などの各大学で所蔵している貴重な化石標本の復元製作に従事
44	23	巨大な花ラフレンシアとショクダイコンニヤクの模型を製作
47	25	宮内庁の依頼により連合軍最高司令部民生局長ホイットニーにマガモの生態剥作を製作
48	"	大型ワニの剥製製作
49	"	日本在来の馬であり稀少な「木曾馬」の剥製製作
53	27	ヒゲサキザルの剥製製作
56	28	名馬シアンモア号の剥製製作
58	"	体長9.7mのツチクジラの剥製製作
59	"	カバの剥製製作を実演し、アサヒグラフ 1953年12月号に「生きているような大太郎君」として紹介される。
60	29	ツチクジラ、ナガスクジラ剥製製作
62	31	西暦132年の張衡の地動計(地震計)の復元模型を製作
63	"	優良秋田犬として天然記念物に指定されていた太郎号の剥製製作
68	34	化石のハナイズミモリウシから復元模型を製作
72	36	富士山でカモシカの生態を調査し、館内にカモシカの生態展示を完成する。
74	"	国立科学博物館に保管されていた「日本オオカミ」の剥製標本を最新の技術でつくりかえる。
77	37	昭島市から発見されたアキシマクジラの化石の復元組立を行う。
79	39	大野伴陸の依頼によりトラの頭部剥製製作
84	42	タイワンカモシカ、ホエジカ、バク、テングザル、オマキザル、スナイロカンガルーの剥製製作
90	44	浩宮殿下御下賜のカメの剥製製作
94	45	チンパンジー(スーチー)の骨格標本を組立てる
97	46	特別天然記念物コウノトリの剥製と骨格標本を製作
98	"	ニューギニアのゴクラクチョウ24点を仮剥製から本剥製に製作
99	"	対馬鹿の剥製製作
101	47	タカアシガニの生態、クラカケアザラシの剥製製作
103	"	特別天然記念物オオサンショウウオの剥製と骨格標本を製作する。
104	"	タテガミオオカミ、カワウソの剥製製作
105	"	剥製製作の永年の功績により黄綬褒章を受章される。

明道中学校教諭